

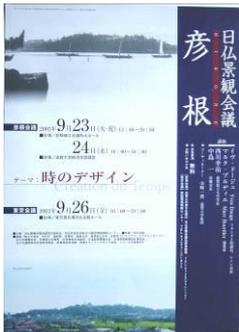
特集：彦根景観フォーラムのあゆみ（2003-2005）

日仏景観会議・彦根会議から世界遺産シンポジウムへ

彦根景観フォーラムは、2004年8月にNPO法人として認可され、2011年で7年目を迎えます。この機会に、これまでのあゆみをたどり、その使命、具体的な目標と活動、課題について振り返ってみます。

日仏景観会議・彦根会議2003

未来に向けた5つの宣言



2003年9月23・24日、日仏景観会議・彦根会議が開催されました。会議では、市内の現状を視察したあと、フランスで彦根に相当するロワール河地域の城下町シノン市の都市計画家と意見交換を行い、歴史景観の保全と中心市街地再生を両立させる取り組みを2市で比較し検討しました。

この中で、彦根市では都市計画上の景観の位置づけが弱い、まちなみを守ろうと主張しながら道路の幅を広げ家の前に自動車を駐車させる矛盾に具体的な解決策を示せていない、景観の歴史的価値を評価する人と組織は誰か、市民がどう参画し合意形成するかについてルールがないなどの問題点が指摘されました。そして、これらを踏まえて、5つの「未来にむけた宣言」が採択されました。

- ① 世界遺産にふさわしい21世紀を起点とした彦根都市ビジョンを作成する。
- ② 彦根らしい都市景観の考え方や制度を研究し、実現に努力する。
- ③ 歴史・文化や技術の調査・研究と再興、教育や生涯にわたる学習を行う。
- ④ 都市景観を維持・創造するために、まちなか観光、まちなか居住を振興する。
- ⑤ 市民・行政・専門家・企業等による永続的な「彦根景観フォーラム」を組織する。

この宣言に基づき、NPO法人彦根景観フォーラムは、2004年に設立・認可されました。

人を惹きつける彦根のアイデンティティ

日仏景観会議でシノン市の都市計画家カティ・サプレーさんは、武家地の雰囲気をはっきり形づけたり保護したりすることが難しいものでした。それ

は、とても繊細なものだったからです。静謐

とでもいうような感じでした。地区を歩く人の観点からうまれたものだと思います。道と塀、そして家に沿って植物が、とりわけ盆栽がありました。時々小さな用水路が流れて、そのためよりいっそう自然な風景につながっていき、まるでまちから逃れていくように思われました」(p70)と語っています。

この繊細で静謐なまちの雰囲気こそ、「過去から受け継いだアイデンティティであり、作り上げるのには非常に時間がかかったけれども、壊すのはほんの一瞬」(p45)とサプレーさんが警告するものでした。(注：引用は、「日仏景観会議・彦根会議」実施報告書、平成15年12月、日仏景観会議実行委員会、滋賀大学産業共同研究センター発行より)

世界遺産に向けた景観シンポジウム

& 町家活用連続講座・・・

彦根景観フォーラムは、目的を「美しい自然環境と歴史的遺産を持つ彦根の景観を、住民とともに考え、活かし、文化の担い手という意識を高めながら、守り育て、慈しみ、未来に働きかける」とし、2004年8月に「花の生涯」、2005年8月に「青い山脈」と彦根で撮影された映画を星空映画祭で紹介しました。また、まちなか観光コースを設定して「歩く観光」をめざした「ぶらっと彦根」を2004年11月に開催、2005年11月には「朝鮮通信使の足跡をたどる」をテーマに韓国京畿大学の金東旭教授らの講演とまち歩きを実施しました。

2005年2月には、彦根景観シンポジウム「世界遺産登録に向けた鎌倉の活動に学ぶ」を宗安寺で開催、さらに6月には「『懐かしい彦根の町なみ』& 市民ワークショップ」を開催し、彦根の世界遺産登録に必要な条件を探るとともに、世界遺産に対する市民の関心を喚起しました。

続いて、5回の町家活用連続講座を開催しました。

力石邸、中居邸、太田邸、旧廣田邸、城町会館と実際の町家で開催した講座では、町家および足軽屋敷の特徴、歴史的な価値、町



屋再生の事例、リフォーム技術、シェアハウスなどの活用事例を紹介し、多くの市民の町家への関心を高めることができました。(つづく)

足軽辻番所サロン・芹橋生活

防災図上訓練に 挑戦しよう



善利組足軽屋敷中居邸

防災・減災をテーマとした6月19日は、彦根市都市計画課と危機管理室の4名のコーディネートで、芹橋地区の住民28名が地図を使った災害図上訓練のワークショップを行いました。

最初に4つのグループに分かれ、滋賀大学の学生、職員、芹橋地区の町内会長、防犯担当委員など、それぞれが名乗り、グループの書記や進行役になりました。次に、彦根市が用意した質問に基づいて、グループに1枚ずつ与えられた大きな芹橋地区の地図に、回答を書き入れていきました。

- ① あなたの住むこの地区の、大切にしたい建物や文化財にマークして下さい。
- ② あなたの住むこの地区の、消火栓や井戸などの水源にマークして下さい。
- ③ あなたの住むこの地区で、地震や火災の際、1人で逃げられない人のいる家にマークして下さい。
- ④ 震度7の地震の際、自分の家から出火した場合、消火の仕方を書いて下さい。電気と水道は止まっていますので、消火栓は使えません。
- ⑤ 震度7の地震の際、近くの城西小学校まで避難経路を書いて下さい。このとき、夜の8時で、電気は止まっています。道幅4m以下の道路は、建物の瓦礫で埋まっています。

このような難問が次々出され、知恵を出し合いますが、なかなか妙案が出ず、現在の芹橋地区の防災



の用意では、震度7の地震で火災が起こった場合は対処できないことがわかりました。

最後に、山崎一

眞理事長のコーディネートで、各グループが問題点を発表し、彦根市都市計画課長や危機管理室長が現在の芹橋地区の防災設備や、彦根市の対応などを回答しました。

次回(7月17日(日)10:00~)は、都市防災の専門家、立命館大学の大窪先生から、4グループの図上の問題点を集約してもらい、新たな問題点の発掘や、減災のためのアイデアを考えます。

それぞれの彦根物語 82 感動の軌跡

—未来に残したい琵琶湖と彦根の情景—



中村一雄さん

6月23日のそれぞれの彦根物語は、プロ級の技量をもつ写真家の中村一雄さんでした。中村さんは彦根に生まれ育ち、写真を撮

り続けて63年。四季を通じての琵琶湖の美しさに魅せられ、野鳥達の姿に興味をもち、長年琵琶湖に通い続け、多くの感動の光景をカメラに収めてこられました。

平成14年に出版された中村一雄写真集「感動の軌跡」は、琵琶湖(特に湖北)とその周辺の写真でまとめた第1部「湖風(うみかぜ)」と、国内を旅して撮った写真を四季に分けて編集した第2部「四季のふれあい」で構成され、これらの中から約100点を抜粋し、その時の状況や撮影の思いを話していただきました。

さらに、全国各地の美しい情景を撮影してきた経験から、彦根城やお堀の周囲の景観や風物を整えて、

写真家たちが季節ごとに何度も訪れたいくなる景観をつくるまちづくりを提案されました。

